礫陵新聞
発行
若松高校新
北九州市若松
発行　編
若松高校新
印刷
㈱阪本印刷所

11月29日〜12月4日　期末考査
12月14日　駅伝大会
12月24日　終業式

大会

生徒と執行部が一体に

生徒会執行部

一人一人の自覚で！

生徒会が求めているのは、みんなの協力です。一人一人の協力なのです。執行部がどんなに協力しても、生徒が無関心であったら生徒会は成り立っていきません。今必要とするのは、生徒一人一人の自覚と、協力です。生徒会とは、執行部と生徒が一体となったときに、初めて成り立つものなのです。

もうすぐ執行部の任期も終わろうとしている。新しい役員を決定する改選日も真近である。しかし生徒は生徒会活動に全くといっていいほど興味を示していない。生徒総会にしろ、学校の行事にしろ、生徒会役員だけで行なわれている。生徒が興味を示さず、生徒会活動に加わっていないのに、生徒会と言えるだろうか。生徒と執行部が一体になってこそ生徒会が成り立つのである。生徒の協力無しで、完璧な活動はできない。そのことについて、執行部の役員の意見を聞いてみた。

—生徒会長鳴尾くんの意見—

あっという間に自分の任期も終わってしまいました。終わってしまうと肩の上の石がとれた気分です。会長に立候補する前の自分と今の自分とでは、とても大きな違いがあります。会長になって得たものは、大変すばらしいものです。自分は今まで何をやってもうまくいきませんでした。勉強もやろうと思うがやる気はないし、これこそはという親友もつくれなかったのです。そんなうだつの上がらない自分でした。今でもその点は全く変わっていません。ですが今までは「自分が何をやってもうまくいかないのは、自分が悪いんじゃない、他人が悪いんだ。」そう思いこんでいた自分が、確かにまちがいであることを知りました。自分が努力して、自分を正していく事が苦しいから、常に自分は、その苦しみからのがれるために、他人を悪くいい、何一つ努力しなかった自分が、最高のひきょう者である事を知っただけでも、自分には、確かな進歩に思えます。

—副会長杉野くんの意見—

やっと終わったという気持と、もう終わったのかという複雑な心境です。文化祭の時などは、文化クラブのみなさんの協力を得て、どうにかできたような、たよりな

の成功、不成功は、生徒のみなさんの協力にかかっています。後期こそ「量より質」で構成された執行部であることを願望し、生徒のみなさんの協力を願います。

そして今まで以上によりよい生徒会を催おしていきましょう。

—書記久米さんの意見—

前期を終えて思うことは、体育祭や文化祭などで、生徒会は、生徒にとけこんでいったと思います。しかし一部の人たちには、協力をしてもらえなかった事は、残念に思います。それと各諸委員会は、もう少し活気を出してほしいです。やるべきことは、ちゃんとやってほしいです。

活動はできません。今後の生徒会活動には、生徒自身進んで加わってほしいと思います。

—書記有川さんの意見—

執行部の活動をしていて、一番困ったことは、やはり人員が足りなくて、満足な活動ができなかったことです。それと、元執行部の人の協力がなく、新しい意見も出ないので、新鮮な感じがなかったです。最も感じたことは、生徒の生徒会への無関心です。何事も生徒の協力がないと、満足な活動はできません。

このような、生徒会に真剣に取り組む執行部の人たちの意見を聞くと、我々生徒の生徒会に対する考え方の相違がはっきりする。生

が悪いんだ。」という考えは大切である。まさにその通り、生徒会を興味のないものにしているのは、生徒自身である。少しでもいいからこのような考えを心の片隅にでも止めていてほしいものだ。

そして、すこしでも自覚を持って行動してほしいものである。ほんとうの生徒会といえるのは、執行部と生徒が一体になったときだ。

フェアプレーか？

体育祭

秋晴れのすがすがしい天気の中で去る九月二十一日、体育祭が行なわれた。空に響きわたるような吹奏楽部の演奏のもとで、三学年とも堂々たる行進をした。

開会式、準備体操が終わり、女子による百米走で火ぶたが切られた。種目が二十七と多く、またそれだけに白熱した競技展開となった。

面白かったのはアメ食い競争で白色美人？になったところなどは見る人を楽しませてくれた。また三年男子によるタンブリングは豪快で、川中島は若い体をぶつけ合い、見る人に迫力を感じさせた。

三年男子の豪快さ、迫力さとはかわって混合障害走では、男女が仲よく手をつないで平均台をわたったり、二人三脚をしたりして、全く気のあったところを見せつけられた。

このような競技を終え昼食時間となった。

午後からは、運動部紹介がまず初めにあった。夏休みに十分練習したためであろう、みんな真黒に日焼けしていた。それから応援合戦は、私たちが今だに忘れることのできないものだろう。各学年とも十分に練習の成果を表わし、団長の運動場いっぱいに響くような声と共に、団員の気合いのこもった演技はすばらしかった。中でも三年生全員の協力で作った'VICTORY'の人文字は、一・二年生にさすがと思わせた。

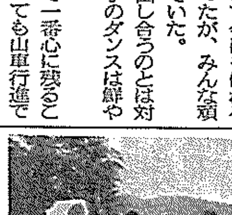
時間がかかりすぎた応援演技が終わり、重量運搬が始まった。一年生は、足がふらふらしていて今にも倒れそうだったが、みんな頑張っていた。

若々しい力を出し合うのとは対照的に、三年女子のダンスは鮮やかであった。

三年生にとって一番心に残ることは、なんといっても山車行進であろう。朝早くから学校に来て、夜遅くまで残って、クラスメートで作りあげただけに、恩師の特徴をよくとらえていてどれもよくできていた。

男子による八百米Rですべての競技が終わった。初め二年生が優勝とアナウンスされ、三年生の中にはすわりこむ人がいた。しかし

仲よく手をつないで



得点係のミスで、三年生が優勝と訂正された。得点係も反則があまりにも多かったので、相当苦労したようだ。もっとみんながフェアプレーをしたら、こんな幕切れはしなかっただろう。二年生には気の毒だったし、三年生にとっては

こんな形で優勝しても、心の底から喜ぶことはできなかったのではないだろうか。

結局三年生・五百八十八点、二年生・五百六十点、一年生・三百九十四点で三年生が優勝した。あっけない幕切れとはなったが、無事終了した。

主張

これを読んだ人の中で、百人中ひとりでも平等という言葉を思い起こしてくれる人があれば幸いである。

平等というのは、頭の中で考えてはいるのに態度に示すのは大変むずかしいものである。例えば実際に私たち大人に満たないものがパン屋にお使いに行くと、お店の人が古い方をくれる等、身近な問題を考えても差別に値することがたくさんあげられる。そのような矛盾した世の中に対して、私たち高校生も平等ということを自分自身の問題として真剣に考える時間を作ってはどうだろう。

もし、私たちのクラスに、家庭の事情で出席日数が少ないために仲の良い友人に恵まれず、家庭が落ち着いてからも学校に来ない生徒がいるとする。そんな場合、私たちは、どんな態度を示すだろうか。完全に無視するか、それともむやみやたらと話しかけるか。どちらにしても良いとも悪いとも言えない。ただひとつ言えることは相手に対して、自然な態度で接した方がよいのではということである。もちろん、そのようにしてもすぐに気持ちの流通が生まれるというのではない。長い時間を要してもクラスメート全員が暖かい思いやりをもって打ちとけようとする姿勢がやがて実を結ぶということである。また、そうすることによって打ちとけた同志が少しずつでも他の多くの人に輪を広げていけるのではないだろうか。

人間は誰も平等だ！

平等という言葉を辞書で引くと「社会を構成する全ての人を差別なく待遇すること。」と書いてある。それなのに部落の人は、まともな職につけないとか、黒人はオリンピックの水泳には出場できないなど、そんな人々を社会を構成する人だと認めていないのではないだろうか。

経験の浅い私たちが、このようなことを言うと「世の中はあまくない。」とか「言葉だけのきれいごと。」とか大人に言われるけれども、大人にだって、私たちと同じように純真に物事を考える時期があったはずである。熱中した時期があったはずである。それだけに今の高校生としての私たちの意見や考えは、一意見として重視されてもいいのではないだろうか。きびしい世界に生きていくうちに、家族のことを考えるのが精一杯になった大人には、広い意味での平等ということを考えれといっても無理かもしれない。

しかし、無理といってそのままにしておくには、あまりにも重要すぎる問題である。

考えれば考えるほどむずかしいこの問題。話し合い以外に解決法はないと思う。すなわち、私たちの率直な気持ちをはっきりと述べまた大人の意見も取り入れていくのである。

そのようにして得た心の団結によって今までにない真の平等が訪れるのではないだろうか。

差別をなくし平等を勝ちとるために、積極的に活動している人がいる。この世の中で堂々と生きることを束縛されている人たちのために自分を投げ出し運動する姿勢は素晴らしいと思う。しかし、だからといって全てが積極的に訴えようというのではない。心の中で平等ということを考えていても仕事が忙しく活動する時間のない人もたくさんいる。もちろん私たち学生にも少しムリかもしれない。それで、私たちに今、出来ることは、自分が差別されている人たちの立場に立ち、暖かく受け入れることができる心を養うことではないだろうか。一人間として認めることではないだろうか。

平等とは「社会を構成する全ての人々を差別なく待偶すること。」である。

美しい環境で

美化コンクール

現在校内で美化に力を入れようとしている。これについては、以前美化委員会で美化コンクールを実施するという事がすでに決定されている。そこでコンクールの提案者である生徒会長、鳴尾君にインタビューしてみた。

—コンクール提案の動機は—

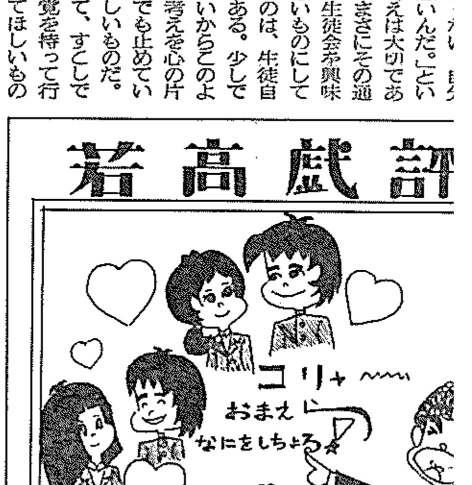
現在の若高は執行部を中心とした生徒会活動を運営している訳だ。今後は専門部を先頭に立っていってほしい。そうすれば全校生徒も生徒会に触れる事ができるからだ。そのためには校内の美化に重視すればいいと考えた。またこれを行なう事によって学校内がきれいになるし、これこそ一石二鳥となる訳だ。若高生が秩序正しい学生になってほしい願いからもこの事を取り上げてみたという事だった。

近頃の掃除状態を見て分かるのだが、校内はとても汚れている。例をあげると廊下では、ある所はきれいに、また他の場所では遠く離れてそこを見たら砂ぼこりが見える始末だ。各教室には掃除道具が一式揃えられているが、それも十分でないクラスがある。これではまともに掃除などできる訳がない。まず道具を揃えてみる必要があるだろう。でもこういったクラスは少数だろうに、それなのに掃除をおろそかにして。そんな事は断じて許されないのだ。

さてコンクールの時期・内容だが、これは十月二十八日より十一月二日まで行なわれ、各学年五名が掃除状態を見廻り、得点を五点満点で採点し結果を発表するとのことだ。

みなさん！校内を美しくして、新たな気持ちで、勉学に励もうではないか。

若高戯評


コリャ〜
おまえら
なにをしちょる！
旅行先ヨリ
修学旅行 or 慰案旅行

礫陵

くわす。
ないでは、
さん」「
つけて呼
び方であ
い。
「いや、
かえって
というか
の結果に
か。実際
呼んで、
ニシモト
はたして
しみがこ
「いや、
にはいう
んだから、
ないのか
しかし、
も呼び捨
い。
「今ど
っている
ことをい
ろう。し
ことだと
いだろうか
て名前を
かえしてい
いことには
そのまま会
いことで
我々は
ない。人の
る。そこに
見ないで人
えれば、人
その呼び方
ある。この
代的に考
にすると
い。
長年呼び
れが習慣に
らない。本
強いて実行
生活の中で
いが、一般
外的にしか
いささか
きたかもし
考えてみる
ないだろう

あなたはあせりを感じませんか！

―三年生インタビュー―

一学期も半ばとなり、就職、進学とそれぞれの目標に向かって、最後の追い込みをかけている三年生の皆さんに、今回は進学についてインタビューしてみました。

―大学へ行く目的は何ですか。
・勉強したい（日本を助ける使命を持っているから）
・遊びたいから
・まだ働きたくないので（社会に出ても順応できる自信がない）
・資格をとる、手に職をつける
・自分の好きなことをやるため
・自分の研究をやりたい（遊びも研究の一つです）
・大学院に行くため
・彼女を作るため
・夏休みが長いから

―受験を他の言葉でいったら？
・血と汗と涙
・ガマン会
・まけそう！
・条件・手段
・狭き門
・灰色の世界
・人生の岐路
・入試

―今の自分の生活は充実していますか。
・していません（このごろマージャンしてないケ）
・すばらしく充実してる
・あまり充実してるとはいえない
・してるヨ
・いっちょも充実しとらん
・中間ぐらいだネ

―ラジオ、テレビはどのくらい？
・テレビは五時間、ラジオは教科によって聞きながらやる
・テレビはほとんど見ないけど、ラジオはつけっ放しです
・全然見ない・聞かない
・テレビ？毎日六時間ぐらい見てるよ
・テレビ聞いて、ラジオ見る
・ラジオを聞きながらは勉強できない、テレビは三十分ぐらい見る

大学に行く目標は？

―あせりを感じますか。
・それ以外の事を感じません
・あせりって…別に感じないナ
・ぜんぜん
・感じませんね、浪人するから
・感じる　モロに

夜食を取っていますか
・親が起きてないから取れない作ってくれたらなあ
・その日によって取ったり取らなかったりいろいろです
・イイヤ（太るから）
・コーヒーを飲む程度
・はい一回ほど

―睡眠時間はどのくらいですか
・六時間ぐらいかな
・不定
・毎日九時間
・八時間以上をモットーとしています
・七～八時間です
・授業中の分もいれるの？

―一・二年生に何か一言
・タバコを吸うな
・古典の単語を勉強しなさい
・ガンバレ
・やめた方がいいんじゃない
・今のうちから勉強しとった方がいいよ
・予備校があるさ！
・多いに酒を飲め
・人のしないことをやってみたらいいよ
・一年生は思い切り何でもやれ
・二年生はそろそろ考えた方がいいのでは……
・今のうちに遊んどった方がいいよ
・思い切り遊べ

いかがでしたか？まじめな顔をして答えてくれた人、おもしろい答はないかと一生懸命考えて答えてくれた人、また中には、インタビューと聞くと、即、退却する人もおり、いろいろでした。進学される皆さん、これから冬に向って受験勉強も一段ときびしさを増していくことと思いますが、受験の日には充分に実力を発揮して、頑張って下さい。

また、一・二年生の皆さんは先輩の良き？アドバイスを聞いて、自己を反省してみて下さい。

歓迎の味

30ぱいの《わんこそば》

―みちのくの旅―西尾紘一―

うす暗い巨大な倉庫を想わすような みちのくへの玄関上野駅を出た急行列車が盛岡へ着いたのは、七月二十四日の早朝であった。真夏というのに冷気が肌にさして、待合室には学生風のカニ族が寒そうにシュラフにくるまって睡眠をむさぼっている。集合時間にはまだ早く夜明けの市街を歩いて廻る。もと南部藩二十万石の城下町盛岡は、今では岩手県の丁度真中に位置し、県庁所在地で中心部にはビルも多い。不来方城ともいわれる盛岡城に登ればひんやりとした杜の中をリスや野鳥が飛びかい、早起きの老人が犬をつれて散歩しているのに出会う。ある調査によれば、人口二十万人の盛岡市は日本一住みやすい町という。実際にこうしてこの町を歩き、人々の行きかうのを眺めても大都会の喧噪や不人情のない落ち着いた平和な町と強く印象づけられた・盛岡の西に民間経営では我国最大二六〇〇ヘクタールを占める小岩井農場がある。明治二十四年に小野、岩崎、井上の三氏の共同出資で始めたため、頭文字をとってこの名があり、現在では「小岩井バター」などで知られている。岩手山を背景に広大な草原にはホルスタインや羊が群をなし、レンガ造りのサイロと牛舎、そしてアカマツ、カラマツの林は、幻想的なメルヘンの世界を想わせる。ここの牛乳は掛け値なしに濃く、子供の頃に飲んだ「牛乳の味」を想い出し、ついつい調子にのって三本も飲み、下痢をしてしまった。

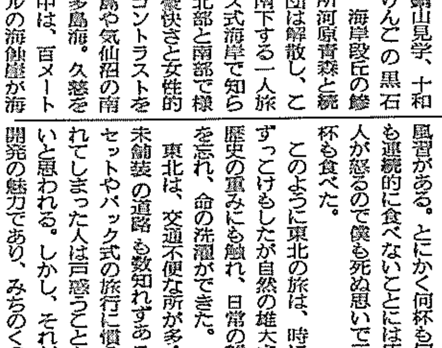
雫石、仙岩峠を経て奥羽山脈を横切って田沢湖へ。この田沢湖と大曲の中間に、みちのくの小京都として城下町の静かなたたずまいを残している角館がある。五百年の昔を今に伝える武家屋敷は、美しい木立ちの中に歴史の年輪を刻みこみ門前の馬のつなぎ石や武者窓のある建物を見ることができる。明治維新までこの町を統括していた佐竹北家は明暦二年（一六五六）に入国したが、その初代義隣は京都の高倉大納言家よりの養子で、この町のたたずまいを、遠い京の地に思いを廻らし、山に囲まれた角館に京の姿を見い出したということである。地名も鴨川、小倉山、東山という具合で町中いたるところに京より取り寄せたという枝垂桜があり、雪深いみちのくに小さな京の町が生まれたのである。下級武士の手内職として生まれた桜皮細工は有名で、桜の木の皮を筒型や箱型の木地に貼りつけた茶入、喫煙具は布で拭けば拭くほど天然の光沢ができ素朴な感じの民芸品で大変気にいった。またここは秋田美人の産地で知られている。なるほど町役場のお嬢さん方は、飾り気のないきれいな娘さんばかりだった。しかし役場の一角にある『でかせぎ課』が目についた時、この町の人々の厳しい自然とのたたかいを痛切に感じないわけにはいかなかった。

角館から秋田、男鹿半島寒風山の眺望、八郎潟の干拓事業を見学して能代市の製材所を訪れた。ここでは地元の秋田さきがけ新聞に我々の能代訪問が大々的に取りあげられ、平穏この町がいかに平穏であるかがうかがわれた。この後も旅は大館、花岡銅山見学、十和田湖奥入瀬渓流、りんごの黒石市、弘前、岩木山、海岸段丘の鯵ケ沢、十三湖、五所河原青森と続いたがここで旅行団は解散し、これから陸中海岸を南下する一人旅が始まった。リアス式海岸で知られる陸中海岸は、北部と南部で様相を一変、男性的豪快さと女性的優美さの鮮やかなコントラストを見せてくれる。松島や気仙沼の南部陸中は溺れ谷と多島海。久慈を中心とする北部陸中は、百メートルから二百メートルの海蝕崖が海面から切り立ってそびえる断崖絶壁のダイナミックな景観が展開、目もくらむばかりである。

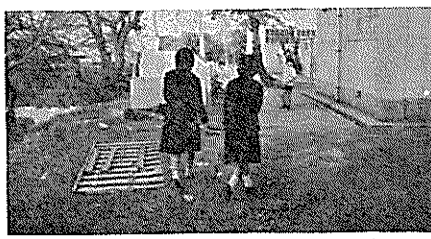
陸中海岸の感激がさめやらぬうちに花巻に入り名物の『わんこそば』を賞味した。このそばは客に饗応する場合、客が「もう沢山」と言って辞退しても尚無理に強いてもてなす風習がある。とにかく何杯も何杯も連続的に食べないことには店の人が怒るので僕も死ぬ思いで三十杯も食べた。

このように東北の旅は、時にはずっこけもしたが自然の雄大さや歴史の重みにも触れ、日常の雑事を忘れ、命の洗濯ができた。

東北は、交通不便な所が多く未舗装の道路も数知れずある。セットやパック式の旅行に慣らされてしまった人は戸惑うことも多いと思われる。しかし、それが未開発の魅力であり、みちのくの値打ちなのかもしれない。


東北旅行　行程図

カメラアイ


重たいナー

ゴミ箱！それは単なるクズ入れであるにすぎない。掃除後のゴミ入れ、そこらに落ちているクズ紙を捨てる雑用入れにしか考えないだろう。

現在、我校の各クラスで使われているゴミ箱、それはみなさん知っているように、木製のものだ。それに角ばっていて所によれば釘などが出ている箇所もずいぶんあるようだ。「こんな事では安心して使えない。木製でできているから重たい。」などという意見を持っている人がいるのでは？例を上げてみると、ゴミを焼く際に、箱も一緒に焼いたという話をちらほら。やはり箱が重たい理由がそういった行為をさせたのかも。

ここで、ゴミ箱改善について、考えてみる必要があるのではないだろうか

ToSyo

文化は進んでいない

「千三百年の間、地下にねむり続けた飛鳥の美男美女が静かな微笑をたたえ、色あざやかな衣装をまとって現われた―」というタイトルで昭和四十七年三月二十一日、奈良県明日香村で、高松塚古墳と称された日本最初の"壁画古墳"が発見された。まだ記憶に新しいと思われる、この発見。みなさんはこの発見にどう共鳴しただろうか。

一つの品物でも、大量生産される今、確かに産業は発達した。月にも、人間の足跡がつくようになった今、確かに科学も発達した。

我々の祖先は、一生懸命進歩を願ってきた。しかし今、産業や科学の発達に伴って、文化は進歩したといえようか。

そうなれば、文化とは果して何か、ということになる。

文化とは、「文明が進んで、生活が便利になること」確かに生活は便利になったといえよう。交通機関の発達により、数時間で外国へと飛び立つことができる。また発達した工業の中で、欲しいものは、お金さえあれば、簡単に手に入る。しかし、これらのことで生活は便利になったといえようか。工場からでる数多くの公害。交通機関がまきおこす数多くの害。こんなことがあっても文化は進んだといえようか。

また文化とは、

「現代までに伝わった文化財のことをいう。」

はじめに書いた高松塚古墳のことでもわかるように、昔の科学で、あんなにも完全な姿のままで、後の世まで残せるものだろうか。あの美しさ、色とりどりの衣装。発達した科学で数多くの塗料がある今、しかしそのすばらしい塗料を使っても、あの美しさは表現できないと私は信じる。

またこれはあの奈良の大仏でも言えることだ。昔の人は機械もなくあのりっぱな大仏を作り上げている。今同じ物を作れといわれれば、即座に作りあげるだろう。が、しかし、心をこめて作りあげた大仏と、機械が作った大仏とでは、我々の心にあたえる何かは違ってくるだろう。時間の短縮により文化は進んだといえようか。

これは音楽の世界でも言えることだ。あのベートベンやバッハなどの音楽が今の世にも聞き親しまれているのは何故か。しかし我々の中では、彼らの音楽を好まない者もいる。そんな人々は何に心のやすらぎを求めているのだろうか。また今後の世界にずっと残せるような音楽が今の私達に作れるだろうか。

一言に文化といっても人それぞれ顔が違うように、受けとり方も違うだろう。しかし、誰もが心にやすらぎを求めるのは同じだと思う。

いろんなものが発達し進歩してきた今、文化もそれらと平行して着実に進歩してきただろうか。いやはっきりいって停滞しているだろう。このままだと後退してしまうかもしれない。

文化とは、心のやすらぎだ。住みにくくなった世の中で、人間誰も心にやすらぎを持ちたいものである。それにはやはり、文化について再認識すべきだ。（一年女）

生徒・職員の一体化を目標に

―響学園訪問―

去る十月十九日、我々は脇の浦にある響学園を訪問した。すでに新聞等で知っての通り、同学園は三月に経営困難のため廃園かと言われた。しかし北九州に唯一のこの学園を廃止してはならないという父兄や先生方の努力で、残されるようになった。その際、前の野菊学園という名前から、精神薄弱者援護更生施設響学園となったわけである。なお経営者側の学園の呼名は、社会福祉法人響学園といい、代表者は横田初次郎氏である。

次に学園の内容について紹介しよう。生徒数は五十二名（男二四女二八）で成人の施設であるが例外として一七才の人が二人いる。職員数は一七名で我々にお話しをして下さったのは関正人先生と広渡信行先生である。学園の毎日は日課表に従われている。大別すると生活指導（起床～消灯まで）職業指導（園芸班、陶芸班、縫製班に分離）の二つである。生活面では毎日入浴させてやれない事が悩みだそうだ。夏はシャワーを利用しているそうである。また建物の老化、最近、施設に入る生徒の症状が重度化しつつある傾向にも悩んでいるそうだ。面会日は第一日曜日だが週に二・三回来る人もいるそうだ。その日には「買物訓練」といって、父兄又は職員から四百円のお金をもらい、あらかじめ職員が用意しておいた菓子を買いお金の出し方やおつりの出し方、もらい方を学習するのである。また、先生方は掃除を生徒と一緒にするなど、生徒と職員の一体化を目指しておられる。最後に、無料で生徒の散髪をして下さっているサロン・ド・シラベの方を始め、援助や心配をして頂いた市民の皆さんに感謝していると語っておられた。

正しい視力を提供する
区内全眼科御指定
コンタクトレンズ 特約店
アイチ眼鏡店
本町三丁目8―24　TEL (70) 3312

天下一品
珍軒
一本町銀座一 (761) 5595

D.P.E カラープリント撮影
ダイワ写真工芸
若松区上原町（若松高校前）
TEL (77) 3173

「自覚せよ！高校生らしさ」

……文化祭事件……

去る九月八日、九日恒例の若高文化祭が催された。普段、活動がめだたない文化クラブを中心に盛大に行なわれた。土曜、日曜と行なわれたせいか、あいにくの雨にもみまわれたにもかかわらず、他校生徒、父兄の大勢の来客でにぎわい、交流を深めるという点では、成功だったようだ。校内は、人目をひくためのポスターや飾りで華やいでいた。「個性」というテーマのもとで、各クラブとも趣向をこらし、音楽部の歌劇から手相研Q会までバラエティーにとんでいた。一年生は、初めてのことだけあって、どのクラブの出し物にも興味深く見入っていた。特に、体育館でおこなわれた生徒によるバンド演奏や手相研Q会が生徒間に大変な反響を呼んでいたようだった。やはり、めずらしいものがうけていたようだ。各会場では、得るものもたくさんあったと思われるのだが、真剣にクラブ員の説明に耳を傾ける人は、少なかったようだ。各クラブとも各々テーマを持ち、それに熱心にとりくんでいて、夏休みをフルに生かして頑張った成果がありありとうかび、若者らしい雰囲気で満たされていることが感じられたようだが…。

八日、夜から九日早朝にかけて物理部の会場と体育館二階の女子更衣室にて盗難がおこった。例年になくこの文化祭は、問題の多いものとなったようである。「泥棒学校」の名が有名になった今では盗難は、決してめずらしいことではないが、今回のような大きな盗難は、初めてである。物理部ではステレオアンプ、無線機、録音テープ、カセットテープレコーダーなど十数点、三十数万円相当。ほとんどが、借り物であるらしい。演劇部では、テープレコーダーなど数万円相当の物が盗まれた。現在では、物理・演劇の両クラブとも、ろくに活動もできない状態である。物理部員は一人二万円の弁償で一応おちついたようだが、額が多いのでまだどうなるかは検討中である。両クラブの部員も戸閉まりなどの不注意はあるが、文化祭にまで盗難事件がおこるとは、なげかわしいことだ。もちろん犯人は本校生徒ではないだろうが…。我々は、盗難になれすぎているのではないだろうか。時計やお金など、盗まれても、マヒしてしまってあたりまえのことのようである。だから、取る方も罪悪感をさほど感じなくなってしまうのだ。今回にしても騒いだのは先生方と一部の関係者生徒だけで、一般生徒の間で少し話題になった程度である。文化祭にやって来た父兄のかさたてにあったかさは、毎年ほとんど、なくなっているという。このようなことをなくすには、学校中を正常な神経にもどす必要があるのではないだろうか。

文化祭も終盤に近づいた九日、また一つの問題が起こった。二年生の男子数名が、お酒を買おうとして、警官に補導され、無期停学の処分を受けた。これは、打ちあげに使うためのものであるらしい。最近は、お酒を飲まない生徒の方が少ないというような現状で、高校生の飲酒はあたりまえのようなことになりつつある。新聞部のアンケートによれば、六十％以上が、お酒を飲んだことがあるというような結果がでた。本来ならば、今度の事件のような事は許せないことだが、これも生徒の間では当たり前のことのように受け取られている。今回の飲酒は、既遂にならずに済んだが、文化祭がおわっての浮付いた気分から起こったことだろう。

そこで、我々は、今回の文化祭を改めて考えてみる必要がある。だれでも平凡な生活をぬけだそうと思い、スリルを求めようとする。しかし、我々は高校生であり、若高生徒の一人であるということを忘れてはならない。高校生らしい行動。どこまでが限界であるか、はっきり自覚するべきである。

クローズアップ

＜その1＞

陸上部女子訪問

数多い我校の体育クラブの中で部員数三名という少人数にもかかわらず毎日おそくまで練習にはげんでいる陸上部女子を訪問してみる事にした。

十月十一日五時すぎグラウンドに行くと野球部、ラクビー部、ハンドボール部など練習している中で陸上部の女子二人を見つけ、さっそくインタビューした。

―陸上部に入った動機は―

走るのが好きだから。それに、陸上を通じて何かを得たかったし。

―最近どういう大会が行なわれましたか―

八月にインターハイがありましたが、成績はあまりよくありませんでした。十一月には新人戦が行なわれます。

―毎日どのように練習していますか―

ウォーミングアップから始めて走る事を中心に計画をたててやっています。

―練習が終わるのはだいたい何時ごろですか―

六時ぐらいです。

―勉強とうまく両立できますか―

最初は慣れなくて、家に帰ると何も手につかずよく母に注意されましたけど、今ではもうすっかり慣れて両立できています。

―今までに苦しかった事は―

短距離をやっていたのですが、タイムが上らず中距離に変わったのですけど、それがなかなか軌道にのらなくて…

―反対に嬉しかったことは―

やっぱりタイムの上った時です。それに練習した後のあのスカッとした気持ちは何とも言えません。いやな事はみんな忘れます。

―陸上部に入って得たものは―

健康になったのは、もちろんですけど、クラブを通じて友だちの大切さなど他では学べないものを学ぶ事ができました。

―今後の目標は―

新人戦をがんばって記録をのばす事。中距離でもがんばりたいと思います。

とのことだった。

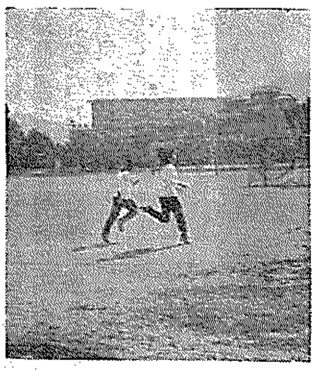
「走る」事が好きだからという純粋な彼女たちの気持ちは何よりもすばらしいと思った。

部員の一人は、タイムを計る時今だに、その場からのがれたくなる衝動にかられるそうだ。

また、一人は中距離に転向したばかりで調子がでずタイムが伸び悩んでいると言う。

たった三人の部員ではあるが、共に苦しみ、共に喜んだかけがいのない仲間たちである。

十一月には新人戦をひかえ、練習に一段と気迫がこもっていた。今後の活躍をよりいっそう期待したいものだ。



ダツシユ　ダツシユ！

九州大会　めざして

吹奏楽部

去る十月七日（月曜日）私たち新聞部員三名は吹奏楽部を訪問した。八月四日に小倉市民会館で行なわれた吹奏楽北九州市部予選で我校の吹奏楽部が金賞を受賞した理由からである。

練習も終わり、ほっとした表情で楽器を片づけている部員に、早速インタビューしてみた。

最初に金賞を受賞した感想を聞くと、中には九州大会まで行きたかったと言う人もいたが、やはりうれしかったの一言である。

練習時間は普通の日で一時間半ぐらいだそうだが、コンクール前の練習は夏休みにかかっていたので十二時から五時までの五時間という長い時間、練習にはげんだそうである。練習は、始めに独自の基礎練習、次に合奏というふうに、構成されている。

練習で先生が続けて指導される等、苦しい面も多かったそうだがやはりみんな楽器が好きなようで「一番楽しいときは」という質問に部員は口をそろえて「合奏するときです。」と答えた。曲のレパートリーは、クラシックからジャズまでかなり広い。今まで演奏した中で好きな曲は「チェスターとアッピア街道」とみんな一致している。

これからやりたい曲は、映画音楽や楽しい感じの曲など、さまざま。

楽器は安いものは五万円から高くなると二十万円もするので、楽器の取り扱いにも気を使っている。

先生はきびしいかという質問に対しては、いろいろな答が返ってきた。きびしいという人もあればもう少し熱心にやってほしいという人もある。だが、コンクール前の練習では先生もかなり熱を入れておられたそうである。

本番前に心がけることは、便所に行く、管を冷やさないなど、演奏を聞くだけの私たちにはわからない苦労も絶えないらしい。

部長から部員に対しての意見は「みんな練習も大切と思うけど、他の面でも仲良くしてほしい。」ということである。

この質問の先生、部長、部員の三つの調和が、あの素晴らしい演奏につながっているのではないだろうか。

これからも一生懸命練習にはげみ、目標の小倉高校めざして頑張ってほしいものである。

先生宅訪問

中間考査を間近かに控えた十月十三日、日曜日、我々新聞部員三名は、世界史担当の赤沢 先生のお宅を訪問した。先生の部屋へ通されると驚いたことに部屋中、本でうまっていた。落ち着いたところで、さっそく質問にとりかかった。

―先生の御出身地と御出身校は―

広島の呉市。出身校は広高校。

―先生になられた動機は―

高校時代から教師になりたいと思ってましたから。

―先生になられて嬉しいことや悲しいことがありましたら―

うれしいことは卒業生が自分の目的を達成したということを知ったことだね。悲しいことは授業をしていて自分の気持ちがうまく生徒に伝わらないとき。

―若高生に対して何か―

のびのびとしていて自分の気持ちを素直に表わしているのですばらしいと思います。しかしその反面基本的な生活態度が若干欠けていると思いますね。

僕は理屈っぽいのかなあ

―赤沢先生の巻―

―男女交際についてどうお考えになりますか―

自分自身においても明確に判断できないので自分の人生観をみつめる点で交際をしたらいいと思いますね。

落ちついたムードで

―先生の生きがいは―

むずかしい質問だねエ。（しばらく考えて）自分の考え方が生徒とふれあう場面を求めていくことだね。

―先生の好きな言葉は―

そうだねエ。（一冊の本を開いて）偏見なき思想は香りなきぶどう酒である。ロイス・ブルック

―先生の御趣味は―

物を鑑賞することですね。

―先生のモットーとされることは―

できるだけユーモアのある生き方をしたいね。

―先生の尊敬される方は―

棟方志功。（版画家）

―先生という職業について何か―

本当の教師とは自分の仕事のために打ちこんでいる人ではないかなあ。（少し考えて）個人的な教師がたくさんいたほうがいいのではないだろうか。教え方のじょうずなのも大事だが、人間的なつながりの方がもっと大事だと思いますね。

―先生の初恋は―

小学校一年の時。となりの席にいた人です。

―家にいる時は何をなさっていますか―

ぼやっとしているけどテレビなんかよく見ますね。仮面ライダーなんかも（子供がよく見るので）

―それでは若高生の長髪についてはどんな御意見をお持ちですか―

それは一つの風俗だから、不自然な目では見ませんね。

―最後に、先生御自身の性格をどのように思っていらっしゃいますか―

（はっきりと）いばりぐせがある。何でもでしゃばる。理屈っぽすぎる。

質問を終えたあと先生はヨーロッパ旅行のアルバムを見せて下さったり、戸畑の町を案内していただいたりして楽しい一日だった。

暖かい雰囲気の中で

（定時制のインタビュー）

去る十月十二日（土曜日）若高坂を楽しそうに話しながらやってくる定時制の人たちに、私たち新聞部員は、定時制の実態・考え方などに興味をもち、さっそくインタビューしてみることにした。

まず最初に、仕事と勉強は両立できるか聞いてみた。ほとんどの人はだいたい両立できていると答えた。中には、少しの時間でもおしんで勉強する人もいるそうだ。あたり前のことのように学校に来ている私たちに比べ社会の真只中で社会生活と学校生活との両立を果たしている彼らは、いろいろな面で強い意志をもっている。

次に、なぜ定時制に入るつもりになったのか聞いてみると、仕事をしていると、お金がたまって遊んでしまうからとか、勉強をしたかったから等、しっかりした答が返ってきた。他には公立の高校にすべったから、専門学校に行きたかったから等の理由で、通っている人もいるそうだ。

定時制でよかったと思うこと、不便と思ったことを聞いてみた。

よかったことは、先生と話し合う機会が多く友だちみたいに思うこと、全体がまとまっている、自由で楽しい、社会のことがわかる等あげられ、不便と思うことは、帰りが遅く、バスがないときもある。授業時間が短い、疲れて眠ってしまう等私たちが経験したこともないようなことだった。

年齢の差などで、意見のくいちがいなどはないか聞いてみた。一クラスに一六才から二七才までいるらしい。年上の人は、他の人に意見をあわせ、個人個々の意見を尊重し、注意などをして、クラスをまとめているので、意見のくいちがいなどはないそうだ。クラスに一人は、みんなをまとめる人がいるらしい。

最後に、今、学校で話題や問題になっていることを聞いてみた。

やはり連合文化祭のこと。定時制の人は、門司高校であるので、全日制の人にも来てほしいといっていた。問題は全然といっていいほどないそうだ。

彼らは学校生活に意義をもっている。勉強をするという姿勢がある。どんなに疲れていても学校だけは行くという。二七才の人でも勉強したいという。

「勉強したい。」定時制には、そういう考えが満ちている。それに、定時制の人は親しみがある。少し話しただけで、もう友だちになってしまう。その雰囲気は、私たち全日制にはないといってもいい。もちろん人数のちがいにもよるだろうが…。

働かなくても良い私たち、全日制。仕事と学校との両立を果たしている定時制。こういう違う立場に立った私たちは、これからもいろいろな面で、全日制と定時制との交流を深めていきたいものである。また、定時制の人は自由な時間がない。しかし精一杯の努力をしている。私たちは、そういう姿勢を見習わなくてはならないのではないだろうか。

ちよつと失礼！

龍そば
本町銀座　TEL (71) 4320
TEL (71) 4047

服飾手芸専門の店
しらき
若松区明治町

楽しいくらしのショッピング
若松
柏 丸柏
本町3丁目　TEL(76)1231

時間に追われた修学旅行

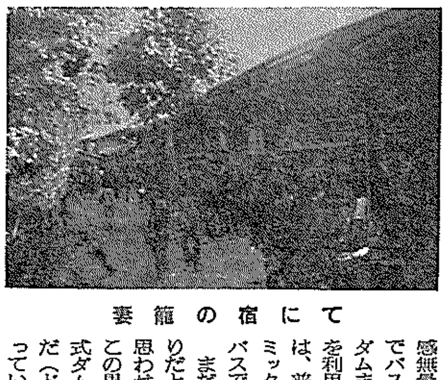
修学旅行。去年九月の末、二年生を見送りながら自分たちの行ける日を楽しみに待っていた。出発する何日も前から旅行の話があちこちに花を咲かせたものだった。

しかし、今回の修学旅行での態度によって、来年度の修学旅行が廃止するか否かが決まる。ということを聞き、少し緊張してしまったがでも、待ちに待った修学旅行は皆にとって思い出深いものになったことだろう。そこで、一・三年の皆さんに旅行のようすを。二年の皆さんには、思い出をふり返ってもらうため、記してみよう。

出発の日（九月二十九日）は日曜日であったせいか、大勢の人から見送られ、元気一杯、胸をふくらませ旅立った。

フェリーの中では、皆の心の中に「旅行で何が待ち受けているのか。」と、心うきうき、夜中になっても騒ぎ続けていた。

翌日、海上で迎えた朝は、何とも言えない、海ならではの良さを味わうことができた。フェリーを降りバスに乗り込み、大阪を後に名神高速道路を通り、一路長野県へ向かった。ここでは、木曽路の宿場町、妻籠宿を見学。若松では見ることのできない、〝昔のにおい〟を感じる風景、山々からは、所々に紅葉した樹木もみられた。



妻籠の宿にて

次は、浦島太郎が晩年を過ごしたといわれる寝覚の床へ。自然が作り出した雄大な岩石は、〝自然の芸術〟といえよう。この後、リンゴ、ブドウ園を背景とし、夕闇迫る中宿泊地美ヶ原へと向かった。長野県は、盆地であるがゆえ朝、晩大変冷え込んだ。

翌日は黒四ダムへと向かった。バスからの風景は、山々の樹木が赤や黄に紅葉し、声もでないくらいの美しさであった。まさしく〝感無量〟である。扇沢までバスで、扇沢から黒四ダムまではトロリーバスを利用した。このバスは、普通のバスと電車をミックスしたような形のバスである。

まだ十月に入ったばかりだというのに、晩秋を思わせる寒さであった。この黒四ダムは、アーチ式ダムの中でも最も進んだ（ドーム）溢流型をとっている。高さは八百六十メートルで日本一を誇っている。みんなも知っているように、このダム建設にあたり、何人もの人の犠牲が払われている。トンネルを通る際、どこからか人々の働く姿、声が…そんな気持ちになった。本当に黒四ダムは壮大である。

次に霧ケ峰高原へと向かった。

長野県を後に甲府をぬけ河口湖へ。中央高速道路を通って、一路東京へと向かった。東京は思ったよりも緑が多く少しびっくりしてしまった。しかし、東京ならではと、高層ビルが立ち並んでいた。

到着してすぐ自由時間六・七時間の自由時間、皆、それぞれ、有意義に楽しく過ごしたことであろう。案内者のいる人は、思いきり楽しむことができただろうが、何もわからない街を二、三人で遊んだ人の中には、かってがわからなく歩け、歩けで疲れた人もいたのではないだろうか。生まれて初めて来た人も、何度か来たことのある人も、それぞれ、高校時代の思い出として、一生、残してほしいものだ。

都内見学は、あいにくの雨で、思うような見学ができず、残念であった。最初の見学は、皇居、江戸城を囲むお堀には、二重橋がかけられてあった。

バスの中から、国会議事堂・内閣総理官邸、大使館、霞ケ関ビルを眺めながら東京タワーへ。ここで最後の買い物、自由行動をとった。

次に、代々木の競技場・NHKスタジオを見学し、東京駅へとバスは向かった。東京―新大阪を新幹線で三時間、六時に到着、夕闇せまる中をバスで、六甲山へ、大阪の夜景を、そして一路、神戸港へと向かった。帰りのフェリーも夜通し騒いでいた。そして九州へ到着、今回の修学旅行は、事故もなく団体生活のきびしさも、知ることができ、思い出深いものとなった。

他校訪問

伝統は「亀」と共に

八幡南高校

去る九月二十八日土曜日、我々新聞部員五名は県立八幡南高校を訪問した。八幡南は国鉄黒崎駅から筑豊電鉄で十五分程の的場町というわりと静かな環境のよい高台にあった。

昭和三十七年に創立され、生徒数千三百六十名。男女比は我校とほぼ同じである。コースは三年になって就職クラス・理科系・文化系にそれぞれ分かれるようになっていて、大学進学率は九十五％くらいである。補習は強制的で、一年は夏休み十日間、二・三年は二十日間で各コースによって時間の配分も異なるらしい。欠点は三十四点でそれに満たない人は我校と同じように追試を受け、最終的には進学会議で決まるということだ。

まず校風については、校訓の「努力・誠実・和親」のもとに全体的にのんびりしているそうである。

次に風紀についてであるが、遅刻者は先生が正門に立ち調べているため少なく盗難も上履をロッカーに入れず、げた箱におくだけなのに少ないということだ。

このように遅刻者、盗難が少ないということは我校にとって、うらやましい限りである。男子の長髪は一応許可されているがスッキリするなどのきびしい規則付きということだ。女子のパーマやカールは禁止だが、なかには破っている人もいるらしい。制帽は生徒の希望で最近廃止され、代わりに校章をつけるそうだ。

靴も黒・茶・白以外はダメということである。また、バイク通学は全面禁止である。喫茶店・映画館・ボウリング場の出入りは自由で、男女交際についてもあまりやかましくないそうだ。生徒手帳は必要がない…ということで今年から廃止になり身分証明書だけである。煙草をすっているところを見つかると即、停学になるなど校則や処罰が厳しいので、さぼるといっても保健室で休む程度らしい。

生徒会活動は我校に比べてやや活発ではあるが、執行部と一般生徒との間がスッキリしなくいつももめているらしい。立候補者はでることはでるが定員に満たないそうである。これはどの高校にもいえる頭の痛い問題である。

体育祭については先生はクラスマッチ形式で生徒は普通の運動会形式でやりたいということから意見がくい違い、もめた結果今年はやらないようになり、今後も二年に一度となったそうだ。

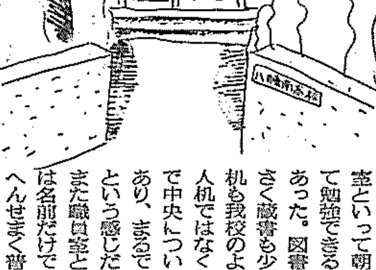
南高には日番の他に週番があって掃除中や放課後、校舎内を見廻るそうだ。そのため盗難が少ないのかもしれない。

我々が校内を案内してもらった時、体育館ではバレー部とバスケット部が練習に励んでいた。クラブ数は体育部十四、文化部十九で我校にない珍らしい部として漫画研究部、郷土研究部がある。強い部は剣道部の女子とテニス部の女子だそうだ。なかでも剣道部は「南校の女剣士」といってインターハイに出場した人もいるらしい。この日はあいにく練習が休みで女剣士の戦いぶりを見ることはできなかった。広々と見はらしの良いグランドでは野球部と陸上部が練習しており、サッカー部に女子が一人いると聞いたので期待していたがこれもまた見ることができなかった。

食堂の前には一匹の犬がつながれており、南高が創立して以来ずっと「亀」という名で生徒にかわいがられているらしい。創立した頃「亀じいさん」という人がとてもかわいがっていたので「亀」と名付けられたということだ。

鉄筋三階建ての校舎には、我校にない進路指導室・就職指導室が見受けられ学習室といって朝早く来て勉強できる部屋もあった。図書館は小さく蔵書も少ない。机も我校のような六人机ではなく二人机で中央についたてがあり、まるで試験場という感じだった。

また職員室というのは名前だけで、たいへんせまく普段先生は学習室という教科別の部屋にいるそうだ。



中庭は純日本的な造りの庭園となっており、そこにはゴミ一つ散らかっていなかった。また校内の窓ガラスも大変きれいにみがかれていた。

二時間ばかりの楽しい語らいの後、新聞部の方に見送られ若松への帰路についた。

あなたのコーナー

―映画紹介―

今回は、「あなたのコーナー」として最近話題になっている映画を紹介したいと思います。

リチャードバック作五木寛之翻訳の空前のベストセラー「かもめのジョナサン」同の映画化によるものです。

―STORY―

ジョナサンは他の仲間のかもめとくらべて一風変わっていた。海岸のゴミ捨て場や、舟が捨てる魚にむらがって一日を生きていくかもめをよそに、ジョナサンは誰もついてこられないような高い大空で自分の限界に挑戦した。

仲間のかもめたちは、ジョナサンを気違いだと悪口を言っていた。また長老たちは、若いかもめがジョナサンの影響を受ける事を恐れ、彼の両親を責めた。愛する両親にまで白い目で見られることを知ったジョナサンは、群に戻ることにした。だが、ゴミ捨て場で仲間を傷つけながらも餌をあさる生活は、ジョナサンには出来なかった。彼は再び大空高く舞い上った。

そこで、かもめのスピードはどこまでが限界なのか考えながら急降下してコントロールを失い、海面に激突した。海面で彼は死が近づくのを感じた。だが彼は心のなかで激しく死と闘い、その力が彼を奇跡的に海面から飛び立たせた。

限界に挑戦するジョナサン

この日から彼の飛翔力は完全なものとなった。それを仲間へ教えようと群にもどったが「終身追放」という長老の決定に彼はさからうことが出来なかった。

ジョナサンは、大陸から大陸へ、大洋から大洋へと旅立った。

彼がチャンという老師にあったのは、孤独感を覚えはじめたころだった。チャンはジョナサンに、時と空間を超越して飛ぶことを教えてくれた。それは、自分を肉体的にも、また精神的にも、完全無欠にすることだった。そして彼は気づいた時自分の群へもどっていた。怒る長老たちを尻目に若いかもめたちは彼に教えを乞うた。まるで彼が神であるかのように。ジョナサンは言った。『ぼくは神なんかじゃない。ただのかもめさ。飛ぶことが人一倍すきなただのかもめなんだ』

（資料・スクリーン）

私達に人生を教える話題作、本と映画をみくらべてみては。

―そのほかの封切作品―

ソフィア・ローレン主演「旅路」エリサベス・テーラー主演「別離」ピーター・フォンダ主演「ダーティー・メリークレイジー・ラリー」マガリ・ノエル主演「フェリーニのアマルコルド」リチャード・ドレイファス「アメリカン・グラフィティ」

――リバイバル映画――

チャールズ・チャップリン主演「黄金狂時代」

芸術の秋だというのに読書もスポーツもしない人、失恋をしてしょげている人、たまには映画鑑賞なんていうのもいいんじゃない。

じょうずにさぼるコツ

数年前、労働医学研究所というところが、「働く女性にとって、お化粧はどんな意味をもっているか」ということを調べたことがある。おもしろいことに、お化粧を禁じられたグループは一日四〇％の女性が疲労を示したのに対し、自由にお化粧のできるグループの疲労度は、わずか一九％だった。

この結果から、お化粧さえすれば仕事の能率が上がると速断されては困るが、ただ、近代生活の中で、なんらかの形で〝本来の自分をとり戻す時間と手段〟をつくり出す事は、決してムダとは言えないという事がわかる。そこには、気分転換とか気晴らしと言われる効果が考えられる。少なくとも、仕事や勉強に疲れた時、ぼんやり机の前で休んでいてはいけない。たとえば、疲れた手を休める時、もう一方の使わなかった手を適当に動かしている方が、疲労回復の大きい事が知られている。じっと静かに休んでいる時に比べて、あとの能率が六〇％から七〇％も高まる。いわば〝積極的休息法〟である。あくびをしてのびをするのもいい。ちょっとトイレに立って顔を洗ってくれば、なお効果がある。音楽を聞くのもいい、外見はサボるのと同じだが、これはあとの能率に好影響を与えるのだ。ただ、これらはあんまりひんぱんにやると、かえって能率が下がる。

それに、疲れた頭は抑制力が弱まるから、うっかり調子に乗りすぎると、かえってあとの能率がガタ落ちになる。気晴らしのつもりの時間が一時間をこえるようでは文字通りのサボリになる。これでは何にもならない。ひとくちに、〝サボる〟と言っても、なまけ者のそれとは違う〝積極的休息法〟である。気分転換の効果がより高まるやり方で、短時間ですぱっと疲れが吹き飛んでしまう。その手をちょっと休める時には、積極的な休息のやり方を実行していただきたい。たっぷり働いたうえで、さっと気分転換する。このコツをのみこむ事がたいせつである。

小山寿著「暮しと健康」より

◈編集後記◈

今回は一年生が中心となり製作しました。始めての新聞、作った感想をのべてもらいました。

○二年生のいない修学旅行中不安ながらも、みんなで力を合わせて作りあげました。

○製作中は苦しいことが沢山あったが、完成した時は大変うれしかった。

○二つの記事を書いたので、忙しかったけど充実していて楽しかった。

○自分の書いた記事が、こうして、活字になるととてもうれしい。

○記事をかくのは苦しかったができあがった時はうれしい。

○一年生だけでできるのかと心配だったがなんとかできたのでよかった。

○今回は二年生が修学旅行のため一年生が主に活動して完成させたものなので私達としてはとてもいい経験となった。

○苦しみをのりこえたあとの喜びは何にもましてうれしい。

○初めて主張に取りくみ、たいへん勉強になった。

○たいへん苦しんだ。

ファッションの秋　今年の秋のファッションはこれできまり
JEANS SHOP WESTERN
Lee. BISON. EDWIN. MCCaMPbelL.
中川町バス停前
ロータリー前
TEL761―2026

安くて おいしい
中山精肉店
本町２丁目 あやどりマーケット
TEL (761) 4197